



メンタルヘルス分野での活用

作業検査法と「ウサギとカメ」の関係

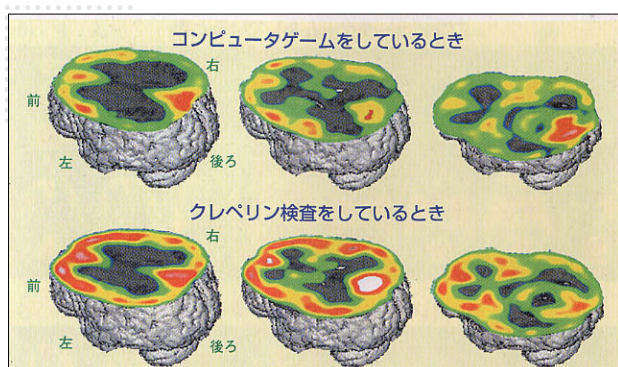
内田クレペリン検査は心理検査のなかで「作業検査法」に分類されますが、作業検査法のメカニズムを考えるにあたって、イソップ物語の「ウサギとカメ」のお話を思い出してみましょう。

このお話では、ウサギとカメが「駆けっこ」という同じ条件の「作業」をそれぞれどのように処理したか、ということが対比的に語られます。この「作業ぶり」の違いにこそ、第三者が評価する「ウサギらしさ」と「カメらしさ」がにじみ出ています。この物語の構造が作業検査のエッセンスに通じています。



「ウサギとカメ」は身体機能を使った「駆けっこ」でしたが、内田クレペリン検査では、精神機能（心理機能）を使った「駆けっこ」として、同一の時間条件で受検者に連続加算をさせます。その結果に「ウサギとカメ」のような個体差が現れてきます。作業プロセスに、受検者の日常生活や仕事の際の特徴（一部）が反映されていると考えるのが作業検査法のメカニズム。質問紙法、投影法とは異なる方法で心理的側面を評価するツールといえます。

一桁の足し算をしているときの脳内の状態



単に足し算の
処理速度をという狭い
範囲のパフォーマンスを見て
いるのではなく、脳全体を活性化
させるような負荷＝ストレスが
かかっていることが
示唆されています。

産業領域／医療領域における検査の利用実績

採用選抜／安全管理での利用

作業検査の特性上、作為や攻略がしにくく、また応募者本人も気がついていない特徴があらわれることがあります。入社後の「働きぶり」を予測できる検査として信頼をいただいています。

採用時のスクリーンだけでなく、定期的に受検させることで、経年による心身のコンディションの変調なども管理しています。



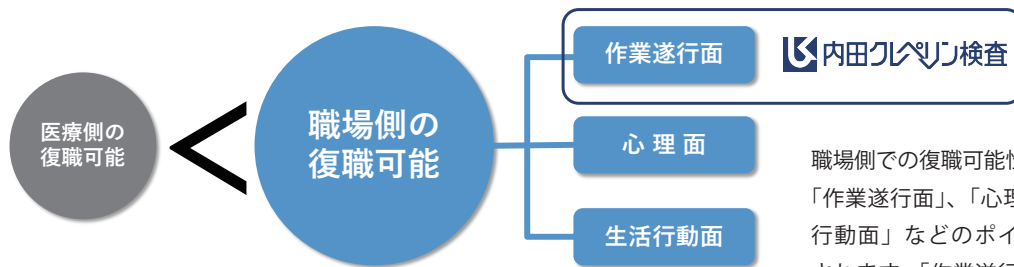
メンタルヘルスでの利用

もともと精神医療分野から誕生した内田クレペリン検査は、医療保険の対象にもなっています。(D285 認知機能検査その他の心理検査) 最近では、リワークプログラムのなかで復職の準備判断などに使用されることが増えています。産業領域と医療領域の両方で使用されてきた内田クレペリン検査ならではのニーズといえます。

メンタルヘルス分野での活用

休職者の復職判断におけるアセスメントツール

種市「職場復帰支援プログラムにおける仕事力評価の試み」
(産業精神保健 18巻1号 2010) より



医療側と職場側において、「復職可能」の判断基準がかならずしも一致していないため、職場側では自組織の事情を踏まえ、あらためて復職可能性のアセスメントを行うことを求められることがあります。

職場側での復職可能性は、さらに「作業遂行面」、「心理面」、「生活行動面」などのポイントに区分されます。「作業遂行面」の客観的評価の情報として内田クレペリン検査を活用する組織が増えてきています。

メンタルヘルス分野での活用

当事者、医療機関、職場の共通言語として

医療現場だけで使用されている検査とは異なり、職場（人事部門）においても結果へのコミットメントが得られやすい。

